



害のないミステリーとメリー・ポピンズ

眞鍋由比

みなさんはゴールデン・ウィークはいかがお過ごしでしたか？

TIMEの4月27日・5月4日号に「世界で最も影響力のある100人」という記事が出ました。その中に日本人としてランクインしたのが村上春樹と近藤麻里絵。

村上春樹はオノ・ヨーコが「政府が保守的に傾いている今、平和を求める貴重な声」と紹介しています。読者の質問に答える「村上さんのところ」というサイトも面白かった。

ユーモラスな答えからシリアスな意見まで絶妙な距離感で答えられていて、読んでいただけで本当に楽しいサイト。個人的には『色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年』の内容を大学の頃、酷い目にあったつくる君が、30過ぎて加害者にお礼参り（巡礼）する物語と断じ、彼を酷い目に合わせた張本人のシロは死んで当然と言い切ってしまった読者のおかげで、私は薦められても読む気になれなかったこの本を読むことができました。正直、読んだ後の感想はかなり違うニュアンスですが、独創的な紹介です。この本はかなり音楽に精通していないと楽しくないかもしれない（曲を知らなくてもYouTubeで再生することはできるので、それを聴きながら読むと雰囲気は出るけど）。しかし、フィンランドにクロに会いに行くときに現在のGFの沙羅が「フォースとともに進みなさい」と言ってくれた時、スターウォーズファンとしてはうれしかった。

（GW中には5月4日もあったことだし。）やはり洗練された小物使い、おしゃれな音楽、気の利いた言い回しを総合的に楽しむ小説なのかなと。別れて別の人と結婚しようとしているGFに「君とこうして会えなくなるのはとても残念だけど、たぶんおめでとうというべきなんだろうね」なんてこじやれたセリフを吐くモテ男くんは少々苦手かなと思いました。

でも緑川（灰田の父が出会ったミュージシャン）が読んでいたものが「害のないミステリー」という言い回しは気に入りました。2日に85才で亡くなったルース・レンデルの『ロウフィールド館の惨劇』はそういうものかも。心理的にはかなり激しい連続殺人だけど、動機が文盲で人を殺すというのは現在の日本では現実的ではないと思うから。でもこの『色彩の持たない〜』も最初、どうして4人から村八分にされるのか、その謎を一人ひとりであって解いていくという意味では心理ミステリーといえるかも。最大の謎は残されたままだけど。

さて、100人のうちのもう一人の日本人・近藤麻里絵さんは『人生がときめく片づけの魔法』の著者。世界中で200万部も売れたそうです。英語ではKondoという動詞が「片づける」という意味になるそうです。片づけが苦手な私の人生は変えなかったけれど、あのシニカルなコメディ映画『ワンダとダイヤとやさしい奴ら』の主演女優ジェイミー・リー・カーティスが彼女を「現代のメリー・ポピンズ」と褒めちぎっています。片づけは国境を越えるのですね。

メリー・ポピンズと言えば、GW中にみた『ウォルト・ディズニーの約束』という映画、面白かった。映画「メリー・ポピンズ」の、家政婦は子どもたちを救いに来たのではなかったという深いお話。少し泣いてしまいました。どうしてあのメリー・ポピンズの映画は水色というかブルー系のイメージなのか、この映画で知りました。

みなさんのGWが有意義なものであったことをお祈りいたします。

